

第 39 回目 新しい人を身に着る (11)

はじめに

●今回は「新しい人を着る」シリーズの第 11 回目で、「賢い者のように歩む」のパートⅢ。「聖霊に満たされなさい」という主題の後半です。

「聖霊に満たされなさい」ということは、何か特別な経験をするものではありません。超自然的な奇跡を起こす力を持つことでもありません。時にはそうした力の賜物をいただく人も稀にはおりますが、みながそうではありません。また恍惚状態になることでもありません。パウロの「聖霊に満たされなさい」という命令は、神の子どもとされた者が、神のいのちにあふれて生きることです。神のいのちにあふれて生きるとは、単純に、神の子であることをいつも喜び、楽しむことができることなのです。

エペソ5章のコンテキスト(文脈)

- (1) 愛されている子どもらしく、愛のうちに歩みなさい。
- (2) 光の子どもらしく歩みなさい。
- (3) 賢い人のように歩みなさい。
  - ① チャンスを十分に生かすこと
  - ② 御霊に満たされること

●前回は、「聖霊に満たされなさい」という命令を理解するために、二つのキーワードを提示しました。一つは、神の救いを、恵みを、神ご自身を「喜び、楽しむこと」、もう一つは「満ち足りることを学ぶ(心)」ことです。神の救いを、恵みを、神ご自身を「喜び、楽しむこと」「満ち足りることを学ぶ(心)」ことを主にある「聖なる遊びの精神」として、オランダの歴史学者ホイジンガの著した「ホモ・ルーデンス(遊び人)」ということばから、聖霊に満たされた人の特徴を挙げてみました。

- ① 喜びと楽しみにあふれている。自由人である。
- ② 満ち足りた心を伴った敬虔(信仰)をもっている。
- ③ いのちに溢れ、創造的、創意的、柔軟性に富んでいる。
- ④ 神の大庭で純心に遊ぶ子どもようである。
- ⑤ 神への賛美も礼拝も、説教も奉仕も遊びとしてしまう。
- ⑥ 聖なる「遊び人」である。

●「すべての遊びは、何にもまして一つの自由な行動です。命令されてする遊び、それはもう遊びではない。」「遊び」と「真面目」の境界線が、常に、流動的。遊びは真面目に転換し、真面目は遊びにいつでも変化する。

●「喜びと楽しみ」と「満ち足りる心」を身に着けること、それは主にある「聖なる遊び」がもたらすいのちの現われです。換言するなら、これが「聖霊に満たされる」ことです。

1. 「聖霊に満たされなさい」(命令)を支える四つの分詞句

◆今回は、エペソ人への手紙 5 章 19~20 節の部分が「聖霊に満たされなさい」という命令とどのような関係にあるかを考えたいと思います。まずは、そのテキストを読みましょう。

# אגרת שאול אל האפסים

【新改訳改訂第3版】エペソ人への手紙 5章 18～20節

18 . . . . 御霊に満たされなさい。

19 詩と賛美と霊の歌とをもって、互いに語り、主に向かって、心から歌い、また賛美しなさい。

20 いつでも、すべてのことについて、私たちの主イエス・キリストの名によって父なる神に感謝しなさい。

●19～20節のテキストと18節の「聖霊に満たされなさい」ということばの関連を見てみると、「御霊に満たされなさい」という一つの命令に対して、原文では、四つの分詞句「語りつつ」「歌いつつ」「賛美しつつ」「感謝しつつ」が連なっています。

## (1) 「互いに語りつつ」とは

●互いに、キリストのことばを教え合ったり、分かち合ったりしながら、互いに影響を及ぼし、感化を与えるという意味です。この「互いに」の直訳は「自分たち自身に向かって」ですが、それを互いに分かち合うことで、自分も周りも共に豊かにされます。ですから、「互いに」というのはきわめて共同体的な営みです。主はそこにとこしえの祝福を命じておられます。

御霊に満たされなさい (命令)

(1) 互いに語りつつ、  
(直訳「自分たち自身に語る」)  
[主に向かって、心から]

(2) 歌いつつ、 } ほめ歌いつつ  
(3) 賛美しつつ、 } (新共同訳)  
[いつも、すべてのことを]

(4) 感謝しつつ、

●当教会では朝の詩篇の瞑想をしながらそれを分かち合うことで、まず自分自身に語りかけ、それを分かち合います。詩篇には、神への礼拝、賛美、嘆きも感謝も、また、神の共同体のあり方もすべて含まれています。パウロがなぜ「詩と賛美と霊の歌」という表現で、「詩篇」としたのでしょうか。ユダヤ教の聖書は大きく三つの部分から構成されています。モーセの律法、預言書(預言者)、そしてそれ以外をすべて「詩篇」(聖文書と一般に言いますが、ルカは詩篇ということばでまとめています)という言い方で区分しています。特に、詩篇にはメシア詩篇というものがあり、キリストの生涯を預言するものが多くあります。詩篇は、御父と御子の信頼というかわりのすばらしさを啓示しているのです。ですから、詩篇を瞑想することで神への信頼の絆を深めることができるのです。「詩篇」には、「律法」や「預言書」にはない生き生きとした神とのかかわりのいのちが記されています。それをういて「互いに語る」こと、つまり、教え合ったり、分かち合ったりしながら、神とのかかわりのいのちに満たされていくことが求められているのです。

●詩篇1篇は「アシュレー・ハーイーツシュ」で始まります。「幸いなのはその人」、あるいは、「何と幸いなことか。その人は」です。「その人」の特徴の一つは「主のおしえを喜びとし、昼も夜もおしえを口ずさむ」ことなのです。「口ずさむ」と訳されたヘブル語動詞は「ハーガー」(הָגַר)ですが、この動詞の意味は牛や羊のように「反芻する」「にれはむ」ことです。つまり、繰り返し、繰り返し、かみしめ続けるように思い巡らすという意味です。換言するならば、主のみおしえ(みことば)を「瞑想する」ことなのです。しかもこの動詞は瞑想したことを「口で語り出す」というニュアンスをも持っています。このようにして、パウロは「互いに語る」ことを勧めているのです。いつの時代においても、神と私たちのかかわりを建て上げていく上で詩篇は最高のテキストです。その意味において、詩篇の瞑想の醍醐味はますます進化、新化、深化されていく必要があります。

## (2) 「歌いつつ」「賛美しつつ」とは

## אגרת שאול אל האפסים

- ①「歌う」とは、声を出して歌うこと。
- ②「賛美する」とは、本来「弦をはじく」という意味。そこから、楽器を奏する、という意味になります。  
※新共同訳では、「歌う」と「賛美する」の二つをまとめて、「ほめ歌いつつ」と訳しています。

●朝の詩篇の瞑想では、必ず、主を賛美します。賛美することによって、私たちの心は神に向けられ、開かれます。賛美することによって、その後の詩篇の瞑想の時に神からの新たな光を与えられることが多くあります。つまり、聖霊によってみことばが開かれるという経験をすることができるのです。聖霊によって恍惚状態になるわけではありません。神との交わりの中で、心が満たされるという至福の時を過ごすのです。別の表現が許されるならば、朝から、御霊の酒に酔うという経験です。小原庄助さんは「朝寝、朝酒、朝湯」で身上をつぶしましたが、私たちは、日々、御霊の朝酒で新しく満たされ、建て上げられていくのです。

●アルコールに満たされるとアルコール依存症になってしまいますが、御霊に満たされると、御霊依存症になってしまいます。パウロはこの「御霊依存症」になりなさいと命じているのです。御霊の酒は神の愛と恵みの祝福の中で私たちを酔わせます。それなしでは生きられないほどにさせます。しかもその酒は何と「ただ(・・・)」です。全くお金がかかりません。そんな楽しみを、自ら喜んでやっているわけです。「注いでください。主よ。いのちの水を」ではなく、「注いでください。主よ。御霊の酒を」「酔わせてください。御霊の酒で」と歌いたいところですが、「酒を注いでください」と歌うと、それを聞く者がつまずくといけませんから、そのように歌わないだけのことです。

●賛美することによって、私たちは神がどのようなお方を心と口で表現しているのです。もしこのことが自覚的な行為とならなければ、そこに神の臨在はありません。しかし私たちが、自覚的に、歌って賛美するということをするなら、神の臨在が私たちの心に満ち溢れます。なぜなら、私たちの心は私たちの口で語ることばによって支配されるからです。礼拝の中で心から主を賛美するなら、神の霊が私たちの心を支配し、告白したとおりの神が支配するようになります。

### (3) 「感謝しつつ」とは

●御霊に満たされる歩みの一つは「賛美する」こと。そしてもう一つは「感謝する」ことです。しかも、「いつでも」「すべてのことについて」感謝することが、御霊に満たされることと深く関係しています。

「いつでも、すべてのこと」とは・・・感謝できる「いつでも」、あるいは、感謝できる「すべてのこと」ではありません。病気の中にあるときでも感謝し、貧しさの中にあるときでも感謝し、苦悩の中にあるときでも感謝し、失意の中にあるときでも感謝し、思うように行かないときでも感謝することです。

●「とてもそんなことはできません。」という声が聞こえそうです。感謝できないのが普通です。しかし、そんなとき、私たちは神を信じる者として、私たちの父である神が自分にとってどのような方であるのかを想起しなければなりません。聖霊はそのことを私たちに教えて下さる方です。その方はイエシュアがこの地上において神の御子として歩まれたときにも、御子にそのことを教え助けた方です。その同じ御霊がイエス・キリストを信じる私たち一人一人のうちに働いておられるのです。その方の教えによれば、私たちの天の父は、良い方であり、良いものしか子に与えようとしない方であるということです。すべての良いものは天の父から来るのです。天の

## אגרת שאול אל האפסים

父は本来的に「与える存在の源泉」なる方であり、与えることを喜びとする方です。とすれば、私たちがこの父に対する健全なかかわりとは何でしょうか。そうです。「感謝すること」です。

●とはいっても、ここで言う「感謝する」とは、現状を肯定して、改善や改革を求めないということではありません。むしろ、ひとつの状況や出来事が持つ意味について、私たちに深く考えさせ、本当に感謝すべき良いものを見分けていく心の構えです。

●詩篇 50 篇 23 節に「感謝のいけにえをささげる人は、わたしをあげよう。」とあります。主の祈りの冒頭に、「天にいます私たちの父よ。御名があげられますように。」(マタイ 6:9)とありますが、私たちはどのようにして御名をあげることができるのでしょうか。詩篇 50 篇 23 節にその答えが記されています。「感謝のいけにえをささげることによって」です。感謝のいけにえを神にささげることは、とても健全な神との関係を築いているということです。

●「感謝のいけにえ」は「賛美のいけにえ」とは異なり、ことばだけでなく、具体的なものを神にささげることを伴います。心だけではありません。口だけではありません。自分にとって大切なものを神にささげるのです。時間も、お金も、能力も、体力も、自分の身体、いや存在そのものも。そのような者を神さまはとても喜んで下さいます。礼拝における献金は、感謝のいけにえ、感謝のささげものなのです。教会はそのような感謝のいけにえによって存立しているのです。

●「感謝すること」と「御霊に満たされる」ことは、密接な関係にあるということをパウロはここで教えようとしています。もろ手をあげることは賛美の時だけではありません。感謝のささげものにおいても、もろ手を上げることができるならどうでしょうか。そうした意味において、感謝とは、私たちの神への信仰が真実なものであるということを、あかしするものさし(バロメーター)でもあります。

●「感謝と賛美を携え、主の御前に進み・・・」という歌があります。今回の「聖霊に満たされなさい」という具体的な指針のキーワードは、みことばの「瞑想」、そこから湧き上がる「感謝」と「賛美」です。心と口とそして私たちの生活のすべてにおいてこれらのことを身につけることこそ、「新しい人」の生き方なのではないでしょうか。それぞれ、自ら点検しつつ、主の御名をあげめる者とさせていただきたいと思います。